

随想

内藤博夫先生についての地理学的考察

生井澤幸子

はじめに

本稿は、筆者の恩師である内藤博夫先生について地理学的に考察することを目的としている。筆者が在学していた当時は、卒論のほとんどすべての題名に〇〇の地理学的考察と付けられていた。この課題を十分にこなせなかった筆者が、ここで大胆にも恩師についての地理学的考察を行うというのだから、何が飛び出そうと、どうかご寛容くださいように！

まず第1章では、先生のいらっしゃる風景を描写することで先生のお人柄を、第2章では、地理学者内藤博夫を、そして第3章では最も思い出深い恩師としての内藤博夫先生について語ることで、あの懐かしい日々のことを思い出しながら、先生への感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

1. 先生のいらっしゃる風景

「あの上品な貴公子みたいな先生よね。」とか「公家の子孫でいらっしゃるのかしら？」とか、内藤先生を語る時に必ずといっていいほど巷で交わされる会話です。誰もが先生に関して共通のイメージを抱いているので、他学科の友人であれ他学部の人であれ噂話が弾みます。これは先生の外見だけに限ったことではありません。筆者は在学中に旧館から新館への引越しを体験したのですが、その時、蔵書や実験器具やらをダンボールに詰める作業を学生もお手伝いしたことがありました。内藤先生はガムテープを20cmほど引き出して、「このテープどうやって使ったらいいのでしょうか？」とおっしゃいましたので、「私、やりま〜す。」といってダンボールの箱をガムテープで閉じました。その後の慰労の席で、先生は「遠藤さん（筆者の旧姓）は、洋服が汚れるのもかまわずに、ダンボール箱にガムテープを貼ってくれたの

ですよ。」と静かに周りを見渡しながらおっしゃいました。「えっ……う〜ん!？」と困惑する筆者。それより何より、周りの皆さん方のお顔をここにうまく再現できないのが残念です。大学時代に誉められたのは後にも先にもこれが一度っきりでした。先生の研究室におじゃまする時に、ドアの前で大きく深呼吸をして、細心の注意を払ってノックをしていたのも、筆者だけではないことをその後の噂話で知りました。

2. 地理学者内藤博夫

経済地理学、なかでも工業地理学を専門とされる先生は、現地調査を重視され、各地の繊維産業の動向をずっと追跡していらっしゃいました。研究者としての先生を表すキーワードを挙げるなら、工業統計表・学校基本調査報告書・八王子・郡内・長井・津田駒などでしょうか。

ていねいに準備された先生の授業は、先行研究にご自身の研究成果を加えたものであり、それらと並行させつつ、さまざまな実践的な方法論をも惜しみなく提供してくださいました。ここではあえて筆者の学生達の言葉を引用して、「おいしい授業」といった方が、役立つというよりもはるかに実情を表していてすてきです。

筆者が地理学者を評価する時に、どうしても単なる理論家や唯の調査屋に冷たくなってしまうのは、あくまで内藤地理学を基準に考えてしまうせいではないかと最近、ふと思ったりします。

3. 恩師内藤博夫先生

「馬鹿な子ほどかわいいうっていいけど、あれって嘘よね。」と同僚がいう。さらに彼女は「できる悪い学生の方が得よね。いつも先生に気にしてもらえるから。」といってため息をついた。彼女自身は一流の研究者である。俗な表現でいうとA

級学者というやつである。その時はアハハと笑って同意した筆者であったが……

以下に内藤先生と筆者のやりとりをできる限り忠実に再現してみようと思う。

筆者：先生。学生がうるさくて、この前、「その3人。うるさい！　すぐに出て行け。」って叫んだんです。

先生：えっ！　その後で、どんな顔をして授業を続けたのですか？

筆者：平気ですよ。そのままの顔で続けました。

先生：一度口から出してしまった言葉は取り消すことはできません。それなら我慢して、何も言わない方がまだいいのです。先生ですからね。この際、もう絶対に怒らないと決めてしまいなさい。何があっても怒らないと決めるのです。いろんなことが次々に起こって、それらすべてに対して、あなたが瞬時にいつも正しい判断を下せるとは思えません。

内藤先生の美学は、不完全な形ではありますが、筆者に受け継がれようとしています。

また、こんなこともありました。

筆者：先生。ドイツに行くことになりました。ご紹介いただいたFlüchterのところですよ。彼のDissertationを日本で最初に紹介しておいてよかった。

先生：海外では決して無理をしないように。海外調査、特に女性の場合は何かと危険が多いでしょうから。頑張り過ぎないようにだけ僕はいいたいですね。

最近、相手の状況によっては頑張れといっぺはいけないだとか、簡単な挨拶に際しても、「頑張り過ぎないようにね。」なんていうのが流行りみたいですが、この表現を筆者が初めて聞いたのは他ならぬ内藤先生からでした。もう随分と前の話です。卒論の締め切りが迫ってきた頃、学生にいつてあげると、とても喜ばれます。ただし、筆者の場合は、そういつつも「死ぬ気で書かないと卒業は無理だぜ。」と密かに思っていたりなんかしますけど……

4. おわりに

内藤先生について地理学的考察を行った結果、あらためて先生への感謝の気持ちでいつぱいにな

りました。実は、まだまだご披露したい研究成果はあるのですが、これは、筆者から先生に直接お伝えしたいと思います。先生と呼ばれる立場になって17年になりますが、学生達から与えられた大切な宝物をいつぱい抱えながら、いつも思うことは、なんと自分は感謝の気持ちを素直に表現することが下手なのだろうということです。「こんな学生をもってよかった。」と内藤先生から思っただけのように歩んでいくことが筆者の今後の展望です。

注

- 1) 筆者の卒論の題名は、当時としては極めて珍しく、地理学的考察というのが付いていない。内藤先生の協力がなければ、実現は不可能であった。
- 2) 献呈論文を書くだけの時間はありませんでした。

なまいざわ さちこ

(22回生、川村学園女子大学教授)